

今月の逸品

NO. 70 2024. 10~2024. 12



恩物帖

明治30 (1897) 年2月
京都府尋常師範学校 附属幼稚園



この「恩物帖」は、令和3年の夏、京都教育大学附属幼稚園の改修工事に伴う引っ越しの際、園長室に置かれた箱の中から見つかったもので、恩物の扱い方が細かく記されている。恩物とは、世界で最初に幼稚園を創設したドイツの教育学者、フレーベルによって1838年に考案された教育玩具で、自然界の法則を単純化した球、円筒、積み木などを系統的に組み合わせて作られており、第1から第20恩物までである。日本では一般的に、第1恩物から第10恩物までを「恩物」、第11恩物から第20恩物までを「手技工作」と呼んで区別している。

わが国の幼児教育は、明治9 (1876) 年に東京女子師範学校附属幼稚園が創設されたことに始まるが、その始まりにあたって模範とされたのがフレーベルの教育思想であり、フレーベルが考案した恩物は、当時の幼稚園教育の中心に位置づけられた。京都府尋常師範学校附属幼稚園(現在の京都教育大学附属幼稚園)においても、東京女子師範学校附属幼稚園の考え方に倣って、恩物による遊戯を用いた保育を行っていたと考えられる。そうした意味で、「恩物帳」は、当時の附属幼稚園における教育内容を知る上で非常に貴重な資料であるといえよう。

この恩物帳が使用されていた明治26年は、京都府女子師範学校附属小学校幼稚保育科から、京都府尋常師範学校附属幼稚園として分離した年で、当時の保育規則には保育科目として「會集・遊戯・唱歌・談話・手業・栽培・養畜」の7科目が挙げられている。この少し前の明治20年には保育科目としてフレーベルの20恩物による遊戯名がそのまま用いられていたが、教師の指示通りに恩物を操作させる形式主義への批判が全国的に高まったことから、明治26年には、恩物による遊戯が主として手業の中にも含められ、幼児の生活そのものを重視した科目へと改められた。

本来、フレーベルは幼児自身が率先して自由に遊び、自己活動力を促進させることを目的に恩物を発案した。現在多くの保育施設で教材として用いられている折り紙や積み木は、恩物の影響を少なからず受けているといえよう。

	恩物		手技工作
第1恩物	六球	第11恩物	穴開け
第2恩物	三体	第12恩物	縫う
第3恩物	積み木(立方体)	第13恩物	描く
第4恩物	積み木(直方体)	第14恩物	組む・編む・織る
第5恩物	積み木(立方体と三角柱)	第15恩物	紙を折る
第6恩物	積み木(立方体と直方体)	第16恩物	紙を切る
第7恩物	色板(正方形と三角形)	第17恩物	豆細工
第8恩物	木の板(5種)	第18恩物	厚紙細工
第9恩物	鏝(金属製)	第19恩物	砂遊び
第10恩物	粒(豆または、小石)	第20恩物	粘土遊び

参考文献：京都教育大学教育学部附属幼稚園/編纂、京都教育大学教育学部附属幼稚園百周年記念誌、1985

執筆者：平井恭子 (幼児教育科教授)

※附属図書館で展示しています。